

第4回佐賀中部広域連合第9期介護保険事業計画策定委員会 会議結果

日時 令和5年12月22日（金） 午後2時から
場所 佐嘉神社記念館 3階会議室

【出席委員】

坂本委員、吉原委員、石丸委員、伊東博己委員、伊東康久委員、上村委員、木下委員、倉田委員、阪本委員、凌委員、城委員、高塚委員、竹下委員、角町委員、南里委員、橋本委員、原田委員、東島委員、平松委員、福島幸子委員、藤崎委員、森園委員、山口委員、吉田委員、八谷委員

【欠席委員】

枝國委員、岡部委員、久野委員、島内委員、永尾委員、中下委員、福島あさ子委員、松尾委員、峰松委員、蘭委員

【事務局】

宮崎事務局長、副島総務課長兼業務課長、金子認定審査課長兼給付課長、川原業務課参事兼副課長兼業務係長、千住給付課副課長兼包括支援係長、松尾総務課庶務係長、高木認定審査課副課長兼介護認定第一係長兼障がい認定係長、間認定審査課認定調整係長、萩原認定審査課介護認定第二係長、広橋給付課給付係長、柿原給付課指導係長、高口業務課賦課収納係長

【会議結果】

- 1 開会（午後2時00分）
- 2 あいさつ（事務局長）
- 3 議事
 - (1) 介護保険事業計画素案
 - (2) 保険料の算定状況（資料1～3で説明）
 - (3) その他
- 4 閉会（午後2時37分）

【主な委員意見等】

3 (1) 介護保険事業計画素案

◇委員 今回、認知症基本法が制定されて、来年1月から施行される。この中で認知症の本人と家族の方の意見を聞いて施策に反映させるというところがある。具体的には県とか市町がやると思うが、この計画にはどのように関わるのか、説明をお願いしたい。

それから、ある若年性認知症の方の話を聞いたところ、認知症の方が集まる施設になかなか行けないでいるとのことだった。熊本辺りでは、そういう若年の方の特化した施設なりを設置している。広域連合の中で、認知症の進行が緩やかな方、そして、元気な方が通う施設がないのではないかと。そういう方に対して連合としてどのような対応をしているのか。

◆事務局 まず、認知症基本法の制定に伴って本人、家族の意見をどういうふうに取り入れるかについて、この法は、共生社会の実現を推進するためのもので、改正内容については、連合の職員と包括センターの職員ともに研修を受けている。研修では、認知症の方のみならず、障害がある方、生活困窮の方も含めて一緒に助け合うことで、お互いを知ることになるということを学んだ。

そういった中で、今までは認知症について、どうしたら認知症にならないようにするべきかという予防の視点だったが、今後は、誰もが認知症になる可能性があるというところの視点に切り換えて、特に偏見がないように、誰もが認知症になりうるという呼びかけをしている。相談などでも家族だけでなく、本人の意見を聞かないといけないと考えている。

素案の中には本人発信支援と書いているが、同じく認知症になった方同士で相談や、認知症地域支援推進員がそれぞれの生活圏域にいるので、本人にとって意見を聞けるような対応ができるように考えている。

それから、若年性に特化した施策について、今のところ若年性の認知症の方、65歳未満の認知症になった方の相談があった場合は、県に若年性認知症コーディネーターがいるので、まずはそちらに相談をして、一緒に取り組んでいくようなかたちを取っている。

軽度の方であれば、社会復帰ができるところ、社会で仕事を続けられる、あるいは仕事ができるようにというところがまずは念頭になるかと思う。具体的にここに行けばというようなところはなかなか出てこないのと、それについて社会全体で理解があるようにというのが地域共生社会というかたちになると考えている。

地域共生社会でそれぞれの地域の中での助け合いというのがどれだけ浸透していくかというところがあるかと思うので、どこかの施設にというより、その地域の中でいろいろなサービスをつくる、あるいは相談し合うところと

というのは、地域に合った拠点というものをつくっていくということなのかなと思うので、全国的な事例を勉強しながら考えている。

◇委員 若年性認知症の方はスマホを使いながら自分の位置情報であるとか、行く場所であるとか、いろんな手帳であるとか、そういう工夫をしながら生活している。だから、そういう情報もどうやったらその若年性認知症の人が助かるかということも含めて、やっぱり助けてあげないといけないと思う。連合で、何年か後にはこういうをつくるという計画も含めてやっていく必要があると思う。

◆事務局 認知症の方の向き合い方として、例えば認知症カフェでも、今言われているのは、認知症の方が何人参加しているかというのを数えると、認知症の方も行きづらくなってしまうということで、ヨーロッパでは認知症の専門の理解が深い方で運営しているけれども、来る方はどなたでも来ていい、どなたが認知症なのか分からないというかたちを取っている。だからこそ行きやすいという考えもあるので、認知症カフェの在り方自体も見直されている。誰もが行けるようなところとして、そういった拠点づくりということをいろいろ考えていかないといけないと考えている。